東北ヘルプ
ニュースレター

2022 年クリスマス号

巻頭言　1 頁

第一部　「復興」を目指し　ネットワークを広げて　2 頁

津波被災地を繋ぐもの　3 頁

2022 年 9 月 17 日(土)「切支丹殉教者合同慰霊祭」
「スピーチ」と「いのり」　4～7 頁

歴史 と 文化 と「復興」と　8～12 頁

「東北キリシタン」と「キリストさん」に出会う旅　13～14 頁

第二部　「復旧」までも　まだ遠く　15 頁

オンライン インタビュー
：2022 年 原発事故現場の今　16～23 頁

福島市に、新しい計測所を　24 頁

献金感謝・会計報告・巻末言　27～30頁

巻頭言「風化に抗って」

２０２２年も、残すところわずかとなりました。東日本大震災から十一年の年月が流れ、あの強烈な記憶も私たちの脳裏から次第に遠くのものとなりつつあるこの頃です。

前号でお知らせしましたように、今年、東北ヘルプは、震災以来四回目の組織変更を行いました。次第に加速しながら代わって行く被災地の現状に適応するため、また、被災地の現場で息の長い活動を支援するため、組織のスリム化や、役割の分担、新しい理事の就任、代表の変更など「出来る限りのことをして、現場に即応できる体制を」と、活動を続けてまいりました。

今回のニュースレターには、一関市藤沢町保呂羽長徳寺に「キリシタン慰霊碑」が建立され、その合同慰霊祭に川上直哉代表が参列しました記事が登場します。キリシタンの歴史と被災地をつなぎ、キリシタンツアーを通して、町おこしや復興支援のお手伝いができないかと、模索してきたことの一つの収穫です。長徳寺の渋谷真之住職は、震災後、東北ヘルプが協力して設立された東北大学「臨床宗教師講座」にて学ばれた方でもあります。藤沢町は江戸時代に多くの殉教者が出た町ですが、長徳寺さんは、そのキリシタンをかくまったお寺として知られています。歴史が掘り起こされ、また、被災地における宗教を超えた協力、弔いなどの課題に取り組んできた東北ヘルプならではの、大変興味深い記事となっております。

また、福島に関連して、石巻市で行われた「飛田晋秀写真展」の記事も見逃せません。私も、支援活動の中で、飛田さんと出会い、その写真をたくさん見せていただきました。飛田さんは、福島県三春町在住の写真家で、もともとは、職人さんの写真を撮ることをテーマにしてきました。しかし、原発事故後、変わり果てた福島の地に衝撃を受け、毎月のように、入ることが制限されてしまった避難区域に足を運んで撮り続けてきた写真の迫力に、多くの人が圧倒されます。私自身は、以前、個人的に飛田さんが見せてくださった、甲状腺がんの手術をした若い方々の首の傷跡が脳裏から離れません。是非お読みいただきたい記事です。

福島では、この秋、福島市に新たに食品放射能計測所を立ち上げようとプロジェクトが進んでおります。今更という感覚を持たれる方もおられるかと思いますが、福島市内の一般住宅の敷地から 10 万ベクレル／kg 近く汚染された土が発見された記事をご記憶の方もおれるかと思います。計測の働きは、この地において、なお、必要とされています。祈りに覚えていただければ幸いです。

東北ヘルプ理事　木田惠嗣

第一部　「復興」を目指し　ネットワークを広げて

「3.11」東日本大震災発災直後、全国から、たくさんの心が寄せられました。その心と共に届いた物の一つが「ランドセル」でした。使い終わり、大切にとってあった「ランドセル」に、ある方は手紙を入れ、ある方は思いを込めて――本当にたくさんの「ランドセル」が津波被災地に届き、そしてたくさんの子どもたちが励まされ勇気づけられました。

しかし程なく、ランドセル業者のご厚意が、被災地に届くようになりました。「新品」のランドセルが、たくさん贈られてきたのです。「中古」のランドセルは、行き場をなくしました。

それから１０年余の月日が経ちました。心ある支援者は「行き場をなくしたランドセル」に心を痛めていました。

そこに「ワイズメンズクラブ国際協会」のネットワークが接続しました。そのネットワークの先に「国際協力 NGO ジョイセフ（JOICFP）」があり、あるいは「国際ライオンズ協会」があり、「東北モンゴル友好協会」がありました。そのネットワークがつながり、数百の思いを込めたランドセルが、海外の子ども達に届けられました。その喜びの様子を伝える写真が、2022 年 11 月、私たちの手許にも届けられました。

以上は「ネットワーク」の力を私たちに伝えるものです。

津波被災地は、今、「復興 10 年」を経て、戸惑っているように思います。確かに「復旧」をしたのだと思います。でも、これは「復興」と呼べるのかどうか――ものすごい額の予算が投じられました。膨大な数のボランティアの力が集まりました。数えきれない支援物資を私たちは受け取り、分かち合いました。でも、今、私たちは戸惑っています。それでもなお「復興」は、はるか遠くに感じられるのです。

お金でも、物資でも、人材でも、届かない現実がある。そのただなかに立って、何を手掛かりにすればよいのか。

おそらく、可能性は「ネットワーク」にあると思います。東北を覚えて、復興に挑戦する人のために祈る、そのような人のつながりの中に、新しい発想とひらめきが生まれると思うのです。それが、閉塞感を破る、私たちの頼りだと思います。そうした「ネットワーク」をつなげ・広げることこそが、「被災支援ネットワーク」と名付けられた私たち東北ヘルプの使命だ、と、そのように思わされています。

「ネットワーク」は、組織や制度によって確保されません。それは“のびやか”なものです。それはおそらく、自分たちの「歴史」や「文化」といった「郷土（ふるさと）とのつながり」の深化によって、いつも豊かに養われるものだと思います。

そのように考えて、私たち東北ヘルプは、2014 年から「東北キリシタンを訪ねる旅」を企画してまいりました。全国から被災地をお訪ねくださる方々に、「東北キリシタン」の歴史を語り、東北の被災地に汗する支援者の歩みを、その歴史につないでご案内してまいりました。ツアーはもう２０回以上、行いました。そのツアーごとに、そしてその準備の度に、東北各地に根を下ろして生きる方々との交流が深まり、その歴史と文化を学びました。そして、少しずつですが、各地をお繋ぎすることができました。

そうした私たちの歩みが、ひとつ、実ったようです。2022 年 9 月 17 日、岩手県と宮城県の県境にある一関市藤沢町で、「切支丹合同慰霊祭」と「大籠キリシタン殉教公園開設２５周年記念講演会」が、午前・午後と続いて行われました。そこには、仙台・石巻・歌津・栗原・大籠・水沢から、各地の郷土史家が集まりました。新聞やテレビによって、それは報道され、私たちのネットワークの広がりを確かめ合うことができました。

本ニュースレター「2022 年クリスマス号」の第一部として、以下に「東北キリシタン」関係の報告をいたします。そこから「被災地の復興」の手がかりを、ご一緒に探したいと願う特集です。

（2022 年 11 月 23 日　川上直哉　記）

津 波 被 災 地 を 繋 ぐ も の

「3.11」の被災地は、広域に広がっています。それを整理するなら、まず、

「津波被災地」 と 「原子力災害被災地」

に大別されます。「原子力災害被災地」については、本ニュースレター「第二部」に記しました。ここでは「津波被災地」を考えてみます。

「津波被災地」は、大きく分けて「仙台以北」と「仙台以南」に分かれると思います。「仙台以北」は、石巻を核として「北上川の水路」と、そして「リアス式海岸」で一つながりになっています。

『石巻かほく』一九九三年十月九日
「伊達の黒船」復元船の竣工を報じています。

1613 年から 1620 年の７年をかけて、日本の「大航海時代」の最後を飾る「慶長遣欧使節」が派遣されました。その使節を乗せて太平洋を二度、往復したのが「伊達の黒船」サン・ファン・バウティスタ号でした。その大型船建造の際、この「北上川」と「リアス式海岸」の二つの水路は一つに繋がり、人と物資を石巻に届けました。その際、遥か広域に広がる各地を繋いだもの一つが「キリシタン」であったと推測されます。そしてその建造事業は、1611 年の「慶長大津波」からの復興事業と一体になっていました。

「北上川」の水路を北上し、現在の宮城県と岩手県の県境に至りますと、「キリシタンの里」が広がります。2011 年、その地は壊滅した「3.11」の津波被災地を支援するための「後方基地」として、大きな役割を担いました。

東北ヘルプは、2011 年の発災以来、「復旧・復興」の鍵は「ハマ（浜＝沿岸部）」と「オカ（丘＝内陸部）」の連帯にある、と考えて、ネットワークの形成に努めてきました。その連帯を作り出すことは、簡単ではありませんでした。工夫が、求められました。その時、「東北キリシタン」の噂が聞こえてきました。江戸時代初め、広域に・しなやかにネットワークを結ぶことで、大規模な「河川改修」を行い、山奥の木炭製造から海岸部の製品流通までを繋いで「製鉄」を産業化したキリシタン。そこに、私たちのネットワーク形成のヒントを得たいと願いました。私たちは、仙台白百合女子大学カトリック研究所と協働し、「東北キリシタン研究」を始めたのでした。

江戸時代、幕府による禁教の圧迫の下、幾度となくキリシタンは虐殺されました。「お上」である幕府は、その「弔い」を禁じました。「キリシタンを人間として扱ってはならない」という政策でした。しかし、心ある寺社は、時間をかけて、その政治的圧迫を撥ね返しました。一関市藤沢町にある時宗・長徳寺は、幕末の 1849 年、江戸時代初期に虐殺されたキリシタンの供養碑を建て、その死を悼み弔ったのでした。

私たち東北ヘルプは、津波の惨劇の中で、まず「弔い」に力を傾注しました。それは他の宗教の方々との協働へと展開し、斎場での「心の相談室」の開設・運営へと至りました。その中で学んだことは「人は、弔われて初めて、人間となる」ということでした。人は必ず死ぬのです。しかし、死者を覚える人がいてくれれば、死すべき私たちの尊厳も保てる。そのことを、深く深く、学んだのでした。そのことを、キリシタンと寺社とのつながりは、また新しく、古い史跡の中から私たちに教えてくれました。

遺族の悲しみに寄り添おうと待機する
宮城県宗教法人連絡協の僧侶と牧師

仙台市葛岡斎場にて
『河北新報』二〇一一年四月十三日

2022 年、長徳時にて「切支丹合同慰霊祭」が行われ、一つの慰霊碑の除幕式が行われました。その慰霊碑には、上記の 1849 年の供養碑と全く同じ字体で「南無阿弥陀仏」と刻まれ、その右には十字架が彫り抜かれていました。そしてその慰霊碑の十字架の中に、鉄の風鈴が吊るされていました。その風鈴は、キリシタンの時代の製鉄法で生み出された鉄で作られたものです。境内を渡る風に乗せて、透明な音色を、その風鈴が静かに響かせていました。

津波被災地を繋ぐものを、私たちは見つけたと思います。それは、人の尊厳を守ろうとする思いでした。それは歴史を繋ぎ、文化を根付かせ、私たちの手許に届いています。これをきっと、活用したいと願っています。

（2022 年 11 月 23 日 川上直哉 記）

２０２２年９月１７日(土)　「切支丹殉教者合同慰霊祭」

「スピーチ」と「祈り」

１．スピーチ

今日は、まことにおめでとうございます。

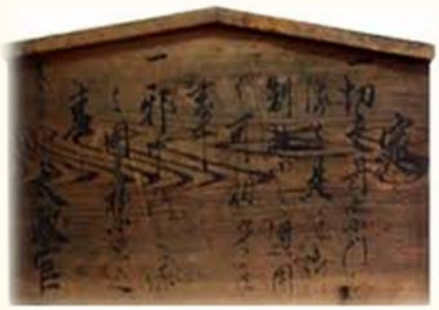
　今朝、今日までのことを、手繰って考えておりました。

2014 年 11 月に、大阪・島根・長崎・大分の四府県の、郷土史家並びに自治体の担当者が「隠れキリシタンの里サミット」を、大阪茨城で、行いました。そこに仙台から牧師が一人、私の友人が行きました（東北ヘルプの中澤竜生理事です）。私は、行きたかったのですが、どうしても行くことができませんでしたから、彼に出席をお願いした、ということだったのです。その「サミット」で、彼はフロアから発言をしました。「東北にも、立派に、キリシタンの歴史があるのです」と。それは、好感をもって迎えられたと、報告をいただきました。これが私にとっての「始まり」に思っています。

　そのあと、本当にたくさんの方々、ここにいらっしゃる方々のお力をいただきながら、「東北キリシタン研究会」が始まりました。また、仙台白百合女子大学カトリック研究所でも「本式に、東北キリシタンの研究を進めましょう」と、バックアップをいただきました。そうした中で、渋谷住職様とも、ご縁をいただきました。初めてお目にかかったとき、私はたぶん「私たちの先達がお世話になりました」と申し上げたと思います。そして、もう少し打ち解けてから、「いつか、ご一緒に、殉教祭ができたらいいのですが・・・」と、言ったような、気がしております。―― 多分、言った気がするのです。

　そして、今日、この日になりました。

　今週の月曜日・火曜日と、南山大学を舞台に、しかしオンラインになってしまいましたが「キリスト教史学会」がありました。そこでは、講演と研究発表と、一つずつ、「1620 年以降のキリシタン」についての大切なお話を聞きました。



1620 年から 1873 年まで
日本全国で掲げられた
キリシタン禁令を告知する「高札」

　1613 年、サン・ファン・バウティスタ号が出帆し、慶長遣欧使節団が派遣されまして、1620 年に、そのすべての行程が終わります。その「終わった後」に、全国的な迫害の時代が始まります。1620 年以降、本当のキリシタン迫害の時代になるのです。しかしそのあとの時代においても、歴史は止まっていなかった。たとえば、キリシタンの間では、少し恥ずかしいことですが、修道会の間での激しい言い争いがあった。あるいは、これは痛ましいことですが、尾張・清州の方で「濃尾崩れ」があった。つまり、「誰が殺された」「何人死んだ」ということ以外の、むしろ「生きている人」の、生々しい・本気の、キリスト者たちの活きた様子が報告されていました。

私は、とてもうれしくなりまして、その通り「うれしく思いました」と、懇親会で（オンラインでも、懇親会はあったのです）申し上げました。そして、「この週末（つまり今日）、この催事が行われます」とお伝えしました。今日のチラシなどを、オンラインの画面でお示ししました。その時の、全国の歴史家たちの表情は、非常に輝いておりました。「そういうことがありうるのか」という感じですね。

そして、オンラインで、歴史学者の皆さんに、私は、次のように申し上げたのでした。「日本の歴史学の中でも、1620 年以降・慶長遣欧使節の後の時代に、いったいキリシタンはどうなったのか、全国的に調べているのだ、ということを、今日の学会で、私は確信しました。そのことを、東北のキリシタン合同慰霊祭で、みんなに伝えようと思います。」すると、学会の懇親会の司会の方が「ぜひ、お伝えください」と言って励ましてくださいました。それで、今、ここに申し上げました。

私たちは、バラバラにやっていて、あるいは時々、学者からは低く見られているような、そんな気になることも、あります。でも、おそらく、そうではない。心ある人々が全国にいて、私たちの取り組みも、その連帯の中にある。そう思います。そして、そうした中で、学問の領域だけではなくて、祈りとか、生きるとか、そうしたことまで包むような、今日の催事が行われましたことは、ほんとうに素晴らしいことだったと感謝しています。渋谷住職に、心からありがたく感謝申し上げます。本当にありがとうございます。以上でございます。失礼いたします。

２．祈り

その人、我等のかたわらにまします。
その人、我等が苦患の歎きに耳かたむけ、
その人、我等と共に泪ぐまれ、
その人、我等に申さるるには、
現世に泣く者こそ倖なれ、
その者、天の国にて微笑まん。

「その人、現世に在します時、多くの旅をなされ、
　傲れる者、力ある者はたずね給わず、
　ひたすら貧しき者、病める者ばかりを訪（とぶら）われ、
　それらの者たちとのみ 語らわした。
　病める者の死する夜は 傍らに坐り、
　夜のあけるまでその手を握られて、
　生き残る者と共に泪ぐまれ
　……おのれは人に仕えるためにこの世に生れしぞと申され……」

「ここに、長き年月、身を売りて生きる女あり。
　湖を渡りてその人の来り給うを聞き伝えり。
　走り、宿に行き、走り、宿に行き、その人のそばに参り、
　ひとことも言いあえず、ただ泪、流れるのみ。
　泪、その人の足をほとほととぬらす。
　その人、申さるるには、
　この泪にてすべて足れり。
　神は汝のあわれさ、悲しさを知れり。
　もはや何も 案ずることなかれと」

慈愛の神、あなたは限りない憐れみをもって、私たちをここに招き、今はこの世になき人々・ともにこの世を生きた人々の、その生涯を覚え、また、その史跡を後世に伝える、その時を、共に過ごさせてくださっています。深く感謝いたします。

先達は、御子イエス・キリストの贖いの恵みを知り、そのうちに生き、また、死にました。その先達と共に生きた人々は、違う宗教・違う生き方をしつつも、その者たちと共に生き、その者たちと語らい、その者たちと共に、また、この世を去って行きました。その中には苦しみがあり、あるいはその苦しみを看取らなければならない痛みがありました。

今、どうぞ、私たちに深く思いを至らせてください。この世に生きることの意味を。共に助け合うことの力を。違いを乗り越える知恵の深さを。どうぞ、私たちに、先達から それらを受け取る力を、お与えください。そのようにして、私たちが互いにつながりあい、そうして私たちが、あなたの生命の輝きを、ともに喜ぶことができますように。

キリストは、復活されました。

キリストは、復活されました。

キリストは、復活されました。

この良い知らせを互いに知り合い、また、その力に生きることができますように。そのようにして、折を得ても、得なくても、あなたは良い方であり、私たちの人生は良いものであり、互いの違いは良いことであることを、互いに語り合うことができますように。

主よ、常に恵みと祝福とを私たちに満たしめ、終わりの日まで、その平安の内を歩ませてください。主イエス・キリストの聖名によって祈ります。

やすかれ、わがこころよ
月日のうつろいなき
み国はやがてきたらん。
うれいは永久に消えて、
かがやくみ顔あおぐ
いのちのさちをぞ受けん。

アーメン

歴史 と 文化 と 「復興」 と

２０２２年１０月４日、東北放送（TBC）のニュース番組において、「特集 隠れキリシタンと政宗の関係」が放映されました（その内容は「ＴＢＣ　キリシタン」と検索くださいますと、インターネットでご高覧頂けます）。

その「特集」は、岩手県一関市藤沢町のご住職・渋谷真之さんと、ＴＢＣディレクターの笠原豊さんの出会いから始まりました。お二人とも、「3. 11」以後の東北の「復興」について、真剣に考え、地道に行動してこられた、その成果として、この「特集」が生まれました。

入り江の全体が防潮堤で囲われた、石巻市雄勝湾

左が渋谷住職 ・ 右が笠原ディレクター

２０１１年から１２年の歳月を経て、津波の被災地は、大きく変貌しました。元の町並みや景色はすっかり消えて、新しい道路が引かれ、巨大な防潮堤が延々と築かれています。その中で、少子高齢過疎の現実が進行している――「復興」とは何か、考えさせられる今の津波被災地を前にして、笠原さんと渋谷さんにお話を聞きたいと思いました。

以下、お二人のインタビューをお分かちします。ご一緒に「復興」とは何であるか、考えてまいりたく願います。

2022 年 11 月 23 日　川上直哉　記

――笠原さんは、渋谷さんと御一緒に、テレビの特集「隠れキリシタンと政宗の関係」を製作なさいました。私たち「東北ヘルプ」は、「風化」に抗（あらが）いたいと願い、また、被災地の交流人口を維持増加させて行きたいと願って、「東北キリシタン研究」を続けてきました。今回、この特集が、そうした私たちの努力にとっても、とても大きな力になったように思われます。

https://newsdig.tbs.co.jp/articles/tbc/170916?display=1

笠原さん：

本当は、渋谷さんのお寺・長徳寺で行われる「蘇民祭」や、寺に残る疫病退散信仰の「若木神（おさなぎしん）」、岩手に残るの聖徳太子信仰の「まいりのほとけ」に注目をしていました。民間信仰の特集をしようと思っていたのです。そしてその中に「東北キリシタン」も組み込もうと思っていました。でもキリシタンと民間信仰を一緒に取り上げるのは、断念しました。

東北のキリシタンの伝承は、とても魅力的です。ただし、今はまだ、キリシタンを特集しますと「一見、怪しげなこと」に見られがちです。今は、たしかにそうなのです。しかし、これからは違ってくるはずだと思っています。

渋谷さん：

番組内でも、「変なこと」だと、反対があったのですか？

笠原さん：

いえ、今回、それはありませんでした。やはり、今回は「伊達政宗とサン・ファン・バウティスタ号」を中心に置き、宮城の歴史の文脈に乗せたことが、功を奏したように思います。ただ一点、「潜伏キリシタン」とするか「隠れキリシタン」とするか、こにだけ、議論がありました。

1620 年に全国展開された「キリシタン禁教」の中で信仰生活を守った人々を「潜伏キリシタン」と呼び、1873 年の禁教解除以降も、江戸時代以来の信仰生活を続けた「かくれキリシタン」の人々と、最近は区別して語るようにようになっています。

渋谷さん：

今、長崎では「潜伏キリシタン」と呼称するようですね。でも、そう定まるまでには、ずいぶん紆余曲折があったそうです。親しくお話を聞いたことがありますが、長崎の人々の間では、堂々巡りにもなったし、揉めたりもしたようでした。

笠原さん：

「潜伏キリシタン」は、形は変化しながら今なお信仰が続き、研究が進んでいる長崎に適応される言葉だと思います。東北とは事情が異なります。私たちの特集では、結局「わかりやすく」するために「隠れキリシタン」という呼称に落ち着いたのでした。

――お二人の自己紹介を、お願いします。

渋谷さん：

一関市藤沢町保呂羽にあります、時宗・長徳寺の住職をしています。出身地は仙台です。父は転勤族でした。サラリーマンとして単身赴任をしていたのですが、その前は和尚さんと学校の先生を兼務していました。私が高校３年の時、父は会社員をしながら、藤沢町内の藤勢寺の住職になったのです。それで、私は高校３年生でしたから、宮城県仙台市から岩手県一関市藤沢町に転校しました。

――大都会から中山間地に転校された。

渋谷さん：

はい。でも、それはとても良いことでした。私はアトピーがひどくて、高校時代、厳しい闘病生活をしていたのです。それからずいぶん経って、今は、ようやく普通に暮らしています。結局、藤沢町の環境が素晴らしいのだと思います。

私自身は、大学に進学した後、仙台でサラリーマンもしていたのですが、父から「お寺を一緒に守らないか」と誘われました。３ヶ月悩みました。結局、両親の近くで暮らそう、と考えて、不安だったけれど、お寺の世界・藤沢の町に入って行ったのでした。そうして、気が付きますと、体調もどんどん、良くなったのでした。

――ご僧侶になる修行は、
どのようになさいましたか？

渋谷さん：

もともと、お寺のお祭りのお手伝いなどを通じて、つながりがありました。１９歳で本山に入ってもいたのです。それから大正大学を卒業し、サラリーマンになったのでした。実はその頃、宗教の世界には、少し、幻滅もしていたのです。葛藤もあった。「自分の力で生きたい」と思って、挑戦をしたのでした。でも、体調の管理には苦労をしました。いろいろなことを考えて、最終的に、住職に迎えていただいたのでした。１５年前のことです。その時の決断について、家族が賛成してくれました。そのことが、とても大きなことでした。

――サラリーマンと住職では、
ずいぶん違いますね。

渋谷さん：

正直に言いますと、「きっと、なんとかなる」と、自信があったのです。でも、それは間違いでした。特に大切な経験として、他の宗教者と一緒に受けた研修で、愕然とさせられたことがあったのです。

――東北ヘルプも立ち上げに関わった
「臨床宗教師研修」ですね。

渋谷さん：

はい。「震災で孫が流され、息子が追いかけて自死した、という老人に向き合う」というロールプレイをした時です。「何も言えない・言葉が出ない」という経験をしました。それは、ショックでした。そしてようやく、他宗・他宗教の方の助力をいただき、何とか少しずつ自分の殻を割って、楽になったのです。でも、そこから、怖くなりました。僧侶あるいは宗教者という役割の重さを自覚したのだと思います。そして、今があると思っています。

笠原さん：

なるほど、震災があり、そこから「臨床宗教師研修」が生まれ、そうして、あの合同慰霊祭もあったのですね。

――笠原さんも、自己紹介をお願いします。

笠原さん：

はい。私は岐阜県で生まれました。海のない環境・山の中で育ちました。１８歳で東京へ行き、テレビ業界に１０年以上身を置きました。テレビ業界は、どこまでも「東京」中心で地方は「周辺」に過ぎませんでした。

「3.11」を受けて、全ての番組が、いったん、止まりました。「震災一色」となり、私たちの仕事がなくなったのです。そうした時期が、私の場合は、３ヶ月ほど続きました。取材した人の中にも、亡くなった人がいると、聞こえてきました。何もしていない自分が、辛く思えました。それで、「いてもたってもいられず」、仙台にある東北放送株式会社へと移って来たのです。2011 年の「3.11」で「地方」に身を置く立場になり、モノの見え方が逆転しました。

メディアというものは、災害がありますと、その現地に全国から「一斉に」やって来るものです。その流れに乗っていない自分が、いったいどうしたらよいのか。「今頃、現地へ」という思いがありました。取材することは、辛かったのです。

でも次第に「知っていないこと」が力になったように思います。特に「復興の過程」に自分の興味を向けることができたのは、良かったと思っています。

震災は、人智を超えています。災害を前にすると、無力を感じます。人災と思われる「原子力災害」でも、それは同じです。でも「復興」は、人間のやることです。それは検証されるべきものです。そのことをいつも意識して、東北の被災地を取材しています。

――そして、今回の特集を製作されました。

笠原さん：

１０年前、津波被災地・気仙沼への取材の道中で、たまたま大籠の隠れキリシタン資料館を見かけたのがきっかけです。それがこんな出会いになるとは思いませんでした。

地元の歴史を、地元の人が知って、誇りを持ち、そして世界に復興を発信する。そういう特集を、今回作ったつもりです。「3.11」の被災地には、たくさんの「震災遺構」というものができました。でも、それだけで、被災地以外の人が被災地に足を運ぶのではない、と思います。地元の暮らしや歴史に興味を持つから、人が訪れるのだと思います。

私自身、取材しながらのこの１０年、東北の「食べ物」や「風土」、「歴史」や「人」

に、惹きつけられ続けました。被災地の取材の中では、たくさんの苦しいことと向き合います。それでも、私は「被災地に行きたい」と思わされていました。それは、不謹慎な言葉かもしれませんが、被災地に「魅力」があったからなのです。それは不思議なことでした。2019 年に「台風１９号」で豪雨災害に遭った宮城県丸森町にも、何度も取材に行きました。その時も、同じことを感じました。東北には、不思議な魅力があります。それは他の地域とは少し違う、特別な魅力だと思います。

――「復興」を意識して取材を続けられ、多くのことを感じてこられましたね。

笠原さん：

何より、取材者の無力を感じてきました。被害も歴史に残ります。しかし、それと同じく「復興」も、歴史に残るのです。果たしてそのことに、当事者は自覚的なのかどうか、気になっています。

たとえば、海をどこまでも隠してしまうようにして延々と建造された巨大な防潮堤を見るたびに「これでよかったのか」と考えさせられます。事情を取材すると、そこには「予算」と「スケジュール」ありきで進められた現実があるのです。その現場では、迷うことも許されていない。しかし、その結果が、歴史に残るのです。でも、現実の日々に流される現地の人は、その事の重大さに、気付けません。それはちょうど、郷土の歴史を地元の人々が見すごしていることと、同じだと思います。

――なるほど。だから、「よその人」が、その気づきの触媒になることがありますね。まさに、渋谷さんは、その役割を負っている。渋谷さんは、「隠れキリシタン」の伝承が色濃く残る地で、僧侶として「地域興し」に励まれています。

渋谷さん：

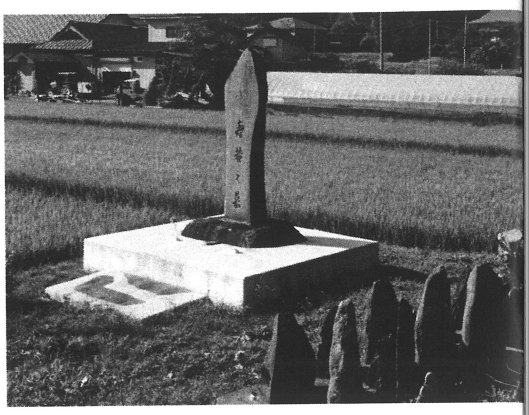
はい。おかげ様です。保呂羽は、宝の山に見えるのです。正直申し上げて、面白くてしょうがない。でも、その宝も、失われつつあります。何とかしたいと、強く願わされています。是非、皆様と共に郷土愛を深めることで地域が元気になればと思います。

――今回、笠原さんが制作されたテレビの「特集」にありました通り、津波被災地には「サン・ファン・バウティスタ号」の物語もあり、そして、津波が遡上した北上川に沿って、キリシタンの伝承が残っている。それらをつなぎ合わせて歴史を物語りつつ、被災地を体験し、東北の魅力にも触れていただく。そうした旅によって「風化」に抗（あらが）う。そんな努力を、私たち「東北ヘルプ」も続けたいと思います。これからもどうぞ、よろしくお願いいたします。（了）

「特集　隠れキリシタンと政宗の関係」は、下のQRコードを読み込んでいただくか、「渋谷真之」と Youtube で検索くだされば、動画が全編ご覧いただけます。

風化に抗って「東北キリシタン」と「キリストさん」に出会う旅

仙台白百合女子大学カトリック研究所客員研究員　　東北ヘルプ事務局長　川上直哉



風にさらされる岩石が、いつか砂となり消えてゆく、そのことを「風化」というそうです。次々と災害が起こります。私たちだけ、特別に覚えていただくことは、できないかもしれません。でも、記憶の風化には、抗いたい。そのための工夫を、と考えていたところ、東北ヘルプ理事の中澤竜生牧師が、一つの提案をしてくださいました。それが、「キリシタンの遺跡」をめぐる旅と被災地ツアーを組み合わせてはどうか、というものでした。

2015年、私は、仙台白百合女子大学カトリック研究所の会議に、東北キリシタン研究を開始することを提案しました。研究所はこれを喜び、応援してくださいました。すぐ私は、宮城県登米市と岩手県一関市の皆様を訪ね、地元の関係機関・組織にご挨拶を申し上げ、登米市長にもお会いして協力をお願いしました。皆様、本当に暖かいお言葉をくださいました。その際、必ず「キリスト教の皆さんにはお世話になったから」と、一言添えていただいたことを、私は感謝して思い出しています。

数多くの協力により、地域に伝わる伝承や史跡の様子が、次第に良く分かってきました。特に、宮城県北部にある「三経塚」の史跡は、極めて重要なものでした。「島原の乱」の約100年後、この地で、120名のキリシタンが殉教した史跡でした。江戸時代中期までキリシタンが多数残存したこと自体、驚くべきことでしたが、加えて、その「首塚」が築かれ、大切に保持されて現在に残されていることは、驚異的なことでした。キリシタンは「人間」としての扱いを受けることなく、その死骸は弔われることがなかった、はずだからです。

そのほかにも・・・

・この地域から伊達藩領内一帯に、「偽装仏教徒」としてキリシタンが残存した形跡が多数残されていること。

・この地域は伊達藩の直轄領であったこと（幕府の公儀とは別の支配論理があっただろうこと）。

・キリシタンは刑死者・餓死者・病死者などを差別することなく弔い、救貧基金を設立し、差別のない相互扶助を広げていたこと（そうして、人間の尊厳を、その基底から守っていたこと）。

・この地域（内陸部山林）から石巻港まで製鉄の長大なラインが形成されていたこと（製鉄の技術は、中国地方から、キリシタンの技師によって伝えられたらしいこと）。

・キリシタン宗はたやすく「一揆（揆を一にすること＝無数の人の思いを一つにすること）」を可能にすること（全国を分断統治したい幕府が恐怖を抱き、撲滅を志したこと）。

・伊達藩は江戸時代最初期、この「一揆」するキリシタンの力を用いて、製鉄・河川改修・農地開拓などの殖産事業を展開したこと。

・江戸時代中期、宮城県内陸地域に相互扶助機構が存在し、その設立者は互いに、「上座等不致様心掛（寄合などで上座につかぬよう心がけよ）」と語りかわしたこと、また、身分最下位の商人が、身分最高位の武士の振る舞いに不誠実を見つけた時、それを「不埒」と指弾したこと、が記録されていること（龍泉院　榮洲瑞芝「國恩記」1776年）。

・江戸時代末期、伊達藩医の娘でもある文筆家・只野眞葛が『キリシタン考』を上梓し、キリシタンが「天主」と「天父」をもつ「危険思想」である、と力説したこと。

・1872年（明治5年＝ロシア正教会が石巻で宣教を本格化した年＝所謂「高札撤去」の前年）の3月11日、仙台でキリスト教徒の大量逮捕者が出たこと（長崎県、佐賀県に続く、宮城県下「耶蘇教講談事件」）。

・・・といった事柄が、つなぎ合わされてきました。

地域の人々の生活に寄り添い、人々の尊厳を守りながら、産業を興す基盤となるネットワークを組み立て、仏教徒・伊達藩などとも緊張感を保ちつつ信頼関係を結び、迫害の中を生き抜いたクリスチャンの先達。教会もなく、十字架も掲げず、牧師も神父も神学者も不在で、聖書すら手元にない。そんな中で、愛の業にひたすら励みつ

◆上記はニュースレター「２０１６年クリスマス号」からの転載です。　「コロナ」後に研修や修養会、被災地ツアーなどをご検討の際、お覚え頂ければ幸いに思い、少しのアップデートを施して、再掲しました。

つ、主の日の到来を待ち続けた信仰の先達。そうした「キリシタン」の姿が、浮かんできました。その姿は、風化する被災地に励むクリスチャン・ワーカー（現地では親しみを込めて「キリストさん」と呼ばれています）への、大きなエールとなって響くように思われてなりません。

東北ヘルプは、この「東北キリシタン」と「キリストさん」をつないでめぐるツアーのガイドをさせていただいています。すでに国内外いくつもの教会・団体がこの企画で被災地とキリシタン史跡を訪れ、私たちと「21世紀の宣教」について、語り合ってくださいました。私は特に、「なぜ、このキリシタンは、江戸時代の終焉後、東北で一旦姿を消したのか」を考えています。そこには、日本宣教のための隠された課題が秘められているように思われてなりません。

「東北キリシタン」と「キリストさん」を訪ねるツアーを企画してくださった団体の一つに、日本キリスト教会の皆様がおられます。その報告書に寄せられた中家契介牧師の報告文を、以下にご紹介いたします。　（2016年10月26日 記）

2022 年の追記：「被災地と東北キリシタン」を訪ねる旅にご興味を持ってくださいましたら、東北ヘルプまでご連絡を賜れば幸いです。（株）ワールドトラベル仙台のお力をお借りして、ご一緒に旅を組み立てることができると思います。

出会いと交わりに感謝　中家契介

私は地元である仙台からの参加でしたが、様々な発見もあり、すばらしいツアーを計画してくださったこと、本当に感謝でした。

最初に訪ねた日本基督教団東北教区被災者支援センター「エマオ」では、震災から5年半が過ぎてもまだというか、むしろ仮設住宅の問題がいっそう深刻になっていることが印象に残りました。仙台市では仮設から入居者が退去し、新居に移る動きがピークを迎えているのに対して、石巻市などでは復興住宅などの供給がなかなか進まず、まだ約半数の方が入居している状況とのこと。また「ただ〈箱物〉を造っておしまいではなく、心の復興が求められている。スローワークを大事にして、寄り添っていきたい」というスタッフの説明が心に残りました。

続いて訪れた南三陸町では、ホテル観洋のスタッフ伊藤さんによる「語り部」ツアーがありました。ボロボロになった建物に案内されましたが、そこはかつてセレモニーホールだったとのこと。震災の日は大勢のお年寄りがカラオケ大会をしていて、急いで家に帰ろうとする人たちをスタッフが出口で通せんぼをして押しとどめて屋上に避難させ、皆が助かったといいます。「助からなかった出来事ばかりが伝えられますが、助かった命もあるということを、この残された建物を通して伝えていきたい。ほんの少しの心がけが、命の分かれ目になるのです」と伊藤さん。

南三陸の町は今、ほとんどの建物が解体され、かさ上げ工事によってピラミッドのような巨大な盛り土があちこちに積み上がっています。「町の風景は、時と共に変わっていきます。例えば小学校の建物がなくなったら、そこに通っていた子どもたち、起こった出来事まで、なかったことになりかねない。だから、言葉で伝えていくことは、時間がたてばたつほど大事になる」とも言われました。南三陸町でも、高台に建物が続々と建てられ、新しい町ができ始めていますが、「建物ができただけではダメで、人と人の心のつながりが生まれてこなければ」と、コミュニティーをつくっていく苦労がうかがえました。

翌日は、キリシタンの史跡を巡りました。2012年の夏に被災地ボランティアでカリタス・ジャパン（カトリック）の米川ベース（宮城県登米市）に宿泊した際に、登米市東和町のあたりにキリシタンがいた話は聞いていましたが、隣接する岩手県一関市藤沢町を含め、こんなにたくさんのキリシタンがいたことに驚きました。また製鉄業の発展と共に聖書の教えが人々に浸透していったことも初耳でした。米川地区で処刑された遺体は、経文と共に3か所に埋められたと伝えられています。その一つである「海無沢（うなざわ）三経塚」を訪れました。ここは日本における最北の殉教地として、全国から巡礼の人々が訪れる場所でもあるそうで、ぜひ全国の皆さまにも訪れていただきたく思います。

併せてお勧めしたいのが、岩手県一関市藤沢町大籠にある「キリシタン殉教公園・資料館」です。300人以上の信者が処刑されたことを覚えて、300段の階段が設けられています。階段がきつい方はスロープで登ることができ、階段とスロープが交差するところに、「ヴィア・ドロローサ」（苦難の道）に模して「イエスの汗を一人の婦人が拭った」といった石碑があります。殉教者たちと共に、主イエスが苦難の道を歩んでくださっていることがあらわされているのでしょう。階段を登り切ったところに彫刻家の舟越保武さんの設計指導による「大籠殉教記念クルス館」があり、そこからは町を一望できる素晴らしい風景が広がっています。

なぜ、こんなに迫害を受けてもキリシタンたちは信仰を守り続けたのかという疑問に対して、ガイドを務めてくださった川上直哉牧師（日本基督教団仙台北三番丁教会）は「病氣になったり、身寄りがなくなったりしても最後まで面倒をみるクリスチャンのあり方、つながりが、信頼されたのではないか」と語っておられましたが、そのキリシタンの信仰は、現代にも息づいているように思いました。

ツアーの最後は、宮城県東松島市の東名・野蒜（とうな・のびる）地区でした。ここで震災後すぐに、多くの支援グループと協力しながら、家の泥出しや修繕作業に従事された日本キリスト改革派東仙台教会は、立石彰牧師と二名のスタッフで、今も「にじいろ楽習会」という学習支援やラーメン店「楓」を通して、地域に関わり続けておられます。そこに、小さい者と共に歩まれる主イエスの姿を見るような思いがしました。私たちも、仮設で暮らしておられる方のこと、原発被害を受けている方のことを忘れることなく、それぞれの場において関わり続けていけたらと思います。青年の参加者が少なかったのが少し残念でしたが、本当にすばらしい出会いと交わりの時となったことを感謝しています。

第二部　「復旧」までも まだ遠く

2011 年の「3.11」は、「三重災害」でした。つまり「地震・津波・原子力」の三つの災害が、一つになって東北地方太平洋側を見舞った。そこに、特徴があります。

「三重災害」の内の「原子力」は、やはり、特別なものと思われます。とにかく「息長い」災害なのです。その災害は、いまだに全容が明らかにならないものです。福島県沖で大きな地震がある度に、私たちは緊張を余儀なくされます。そして、震災前であれば絶対に許容できないレベルの放射線量を「問題ない」として日常が取り戻されて行く・・・その矛盾の中で、被災地は分断され、孤立させられているように見えます。

「津波被災地」と「原子力災害被災地」を、なんとか、繋ぎたい。

私たちは、ずっと、そう願い、工夫をしてきました。2022 年 2 月、仙台市で「飛田晋秀 写真展」が開催されました。飛田さんは原発事故現場付近を長く「定点観測」して写真に残し続けているカメラマンです。東北ヘルプはニュースレター「2022 年イースター号」で飛田さんにインタビューをお願いしました（ぜひ、東北ヘルプのホームページから、バックナンバーをご覧ください）。

その後すぐの 2022 年 3 月 16 日、仙台での「飛田晋秀 写真展」実行委員会のお一人が、東北ヘルプ事務局を訪ねて来られました。「女川原発も気がかりです。宮城県北で、同じような写真展ができませんか」というご相談で、お越しになったのでした。

早速、東北ヘルプは石巻の仲間に相談を持ち掛けました。すぐ、新しい実行委員会が結成され、準備が始まりました。そして 2022 年 10 月 21 日～23 日の三日間、石巻の新しい文化施設「まきあーとテラス」の市民ギャラリーにて、「飛田晋秀 写真展 福島の記憶」が開催されたのでした。

写真展は、盛会のうちに終わりました。３００人を超える来場者がありました。石巻市のみならず、仙台市や福島県からも、参加者が訪れました。ＮＨＫが東北全域に報道してくださったことも、大きかったと思います。そしてそれ以上に、多くの方々の関心が、決して福島原発事故から離れていないことを、私たちは知ったことでした。

原発事故は、まだ終息していないのです。「復旧」は、まだままだ遠い事柄と思われます。それが現実です。でも、それがはっきり見えなくなっています。そこで、今回のニュースレターは「第二部」として、飛田さんにもう一度（オンラインで）ご登場いただきました。飛田さんは、2022 年の原発事故被災地の現状を、写真を用いてご報告下さいました。聞き手には、宮城県南で原発事故被災者のための活動を地道に展開しておられる「かたつむりの会」の鴫原さんに、お願いをしました（鴫原さんのご活動については、ニュースレター「2020 年イースター号」と「2021 年夏号」をご覧ください）。

私たちの支援活動は、少なくとも原発事故に対応する限り「まだまだ、これから」だと思います。そうした現状に対応するべく、「放射能計測所」の移設作業が進んでいます。その報告を、飛田さんのご報告の後に付しました。ぜひ、お覚え頂ければ幸いです。

復旧までも、まだ遠く、原子力被災地はうめいているように思われます。その現場に、まだ立たせていただいていることは、本当に不思議です。私たちの責任を思います。皆様のご支援の貴さを、噛み締めながらこの「第二部」を作っています。

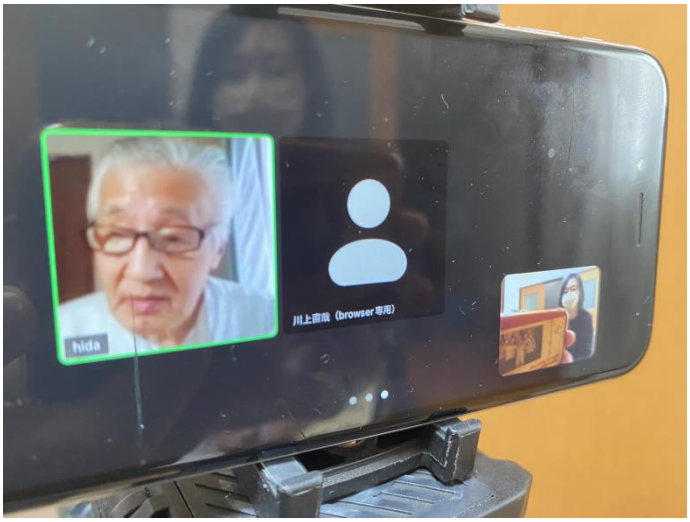
（2022 年 11 月 23 日　川上直哉　記）

オンラインインタビュー：２０２２年　原発事故現場付近の今

――石巻での「写真展」では、本当にお世話になりました。津波の被災者の多い地域です。「家を失う」「故郷を失う」ということの重みを、来場された方々が、とても強くお感じになったご様子でした。

飛田さん：

その節は本当にお世話になりました。実は先週も、神戸大学の低線量被曝研究会がありまして、ご招待をいただき、お話をしてきました。そのまま、いろいろな団体が集まる「団結祭り」に参加した。千人ほどが集まり、全国からたくさんの団体が集まっていました。そこでも、３０分のお話をしました。皆さん、ずいぶん真剣に話を聞いておられました。石巻だけでなく、関西でも、他の地域でも、関心は高く維持されていると感じて、励まされています。



インタビューは Zoom を使ってオンラインで行いまいした。

――今日は、宮城県南の「原子力災害への支援活動」に取り組んでおられる鴫原さんと一緒に、2022 年の原発事故被災地の状況を教えていただきます。

まず、飛田さんの自己紹介をお願いします。

飛田さん：

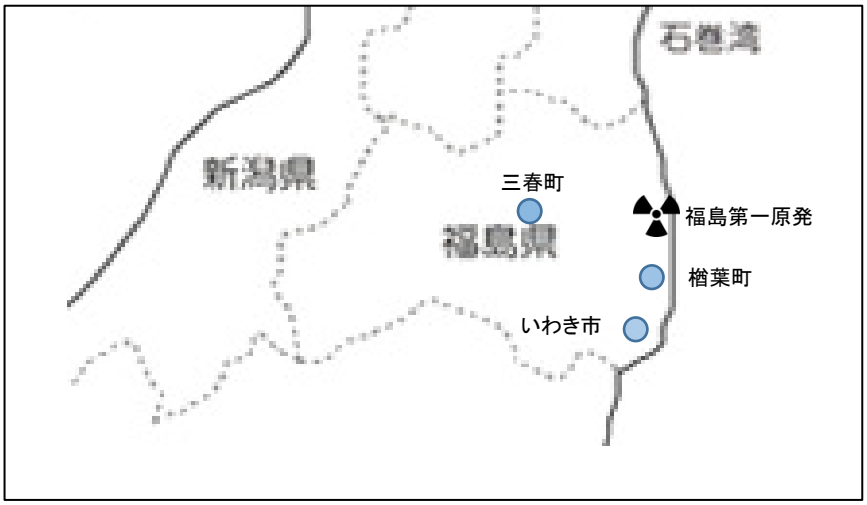
私は、職人を専門に取材するカメラマンです。『三春の職人』（ 朝日新聞出版サービス、1999 年 ）という本などを出しています。

2011 年 2 月中旬、九州を回って職人の取材をし、編集をしていたところで「3.11」となりました。被災した福島県いわき市小名浜に知り合いがいまして、連絡をくれました。「ゴーストタウンだ」と聞いて、案内してもらったのが、原発事故現場へのかかわりの始めです。結局、その知り合いの方は 7 人もの知人を津波で亡くし、行方不明も 5 人となったのでした。

「こんなひどい被害でも、きっと、風化してしまう。そうならないように、努力しよう」と相談されました。それで、2011 年 4 月下旬から、強制避難地となっていた楢葉町に行き「立ち入り禁止」の柵の前まで行ったのですが、やはり、それ以上の取材はできませんでした。

その後、私の住んでいる三春町で、強制避難者のためのボランティアをしていました。そこで良い出会いに恵まれ、2012 年 1 月末に、ようやく、強制避難地の中へ入ったのでした。

初めて入った現地で、私は、シャッターを切れないでいました。街はあるのに、人がいない。恐怖感を感じたのです。国道 6 号線には、信号だけが機能している。その光景は、その後ずっと、脳裏から離れませんでした。



風の音。

地震で被災した家。

目をつぶると風が見えるような気がします。

「これが、被災からまもなく１年を過ぎた街なのか」と。

「事故が起きるとこうなる」と、痛切に思い知らされました。

目に何も見えず、味もしない、

カウンターの数値だけが上がっていく。

それが、放射線だ。

そういうことを体験して、それからずっと、現地に入っています。

――どれくらいの頻度で、現地に入られたのですか？

飛田さん：

だいたい、一か月に４回くらい。少なくても２回くらい、入っています。ですから、年間２０回くらい、現地に入っていることになります。

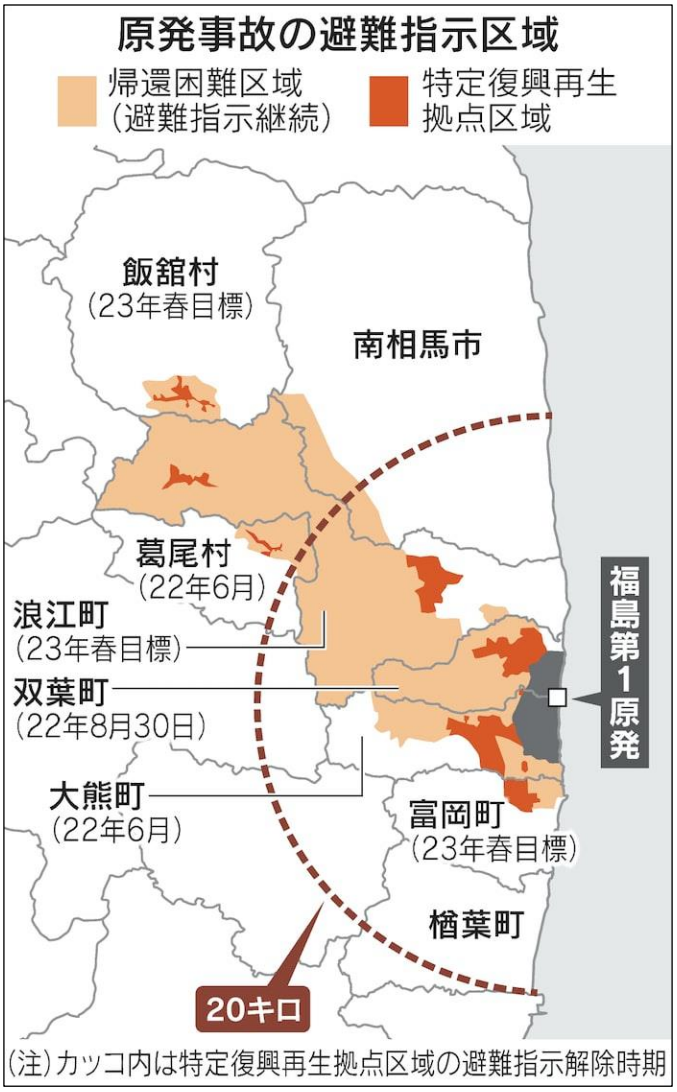
――今、現地のあちこちで、
「避難指示解除」となりました。
強制避難地は、少しずつ、解除されている。
そして、どうなっているでしょうか。

飛田さん：

避難指示解除となった地域で、地元の人に会うことは、ほとんどありません。作業員ばかり、すごい人数がいます。ですから、日曜日になると、元強制避難地域だった「解除地域」には、店員しかいないのです。その店員も、南のいわき市から通っている、というのです。つまり、往復 3 時間かけて、避難解除地域に通っているわけです。

店内は、線量は低いから、まだよいのです。道路に出ますと、今でも「1.6 マイクロ Sv/h」だったり、あるいは、自動車の中でも「3 マイクロ Sv/h」を計測したりするのが、避難解除地域なのです。

こうした場所に「帰還」すること。そうした場所で仕事をすること。そのリスクの高さを、長期的には覚悟しなければならない。そんな現実を見ています。



『日本経済新聞』2022 年 8 月 28 日

――そうした現実を、飛田さんは、福島県外の人にお話になっているのですね。
皆さん、どんな反応をお示しになりますか。

飛田さん：

先日の神戸大学の専門家の先生は「そんなところには、絶対入っちゃいけない」と、語気を強めて、はっきり言っていました。当然だと思います。でも、ここ福島県内では、その当然のことが、語られなくなって久しいのです。

――鴫原さんは、今日、飛田さんと初めてお話になりますね。自己紹介をお願いします。

鴫原さん：

鴫原敦子と申します。どうぞよろしくお願いします。

「鴫原」という苗字は、福島でよく聞かれるものです。父方が、現在の福島県伊達市内の出身なのです。学生時代、私も福島県内にいました。私にとって、福島は故郷です。

「3.11」の時、私は宮城県岩沼市にいました。仙台市より少し南です。震災が起きて、まず、津波被害の対応に当たりました。同じくらいの子供を持つ親たちと、ボランティアをしていたのです。

発災後すぐ、岩沼や宮城県南の人々、柴田、大河原、角田などのお母さんたちが、原発災害に対応して動き出していました。県境を超える被害が出ているはずでしたが、とにかく、実態が不明なままに時が過ぎました。宮城県からの情報によると、とにかく「大丈夫」と言うばかりです。しかし、実際には、宮城県は極めて限られた地点の放射能の値しか測っていなかったのです

これではいけないと、私たちは「放射線量・放射能値を測って欲しい」と、行政機関に要望しました。そして、子どもの健康を守るための「学び合い」の場を作りました。各地で、多くの方々が、そうした動きに参加し始めていたのです。

そのようにして、一市民としての活動が広がりました。そうして集まってきた情報を、みんなで共有した中で、チームが生まれました。そして、心配をするお母さんたちと県外のお医者様が力を合わせて「甲状腺検査」を始めました。東北ヘルプのニュースレターでも、以前取り上げていただいた通りです。ずっと、宮城県南のお母さんたちが参加してくださっていました。しかし、残念ながら「コロナ」で今は活動が中断しています。

でも「甲状腺検査」を開始した時は、多くの人が殺到しました。心配する人の多さに気づいたことでした。「表に出てこない不安」ということです。そして、その不安を覚える人々の「つながり」の必要性を感じました。その「つながり」を残すために、活動の記録を残そうと考えました。「復興完了」とされてしまうことが、2021 年の「10 年」に、心配されました。その前に、と思い、みんなで記録集を発行したのでした。

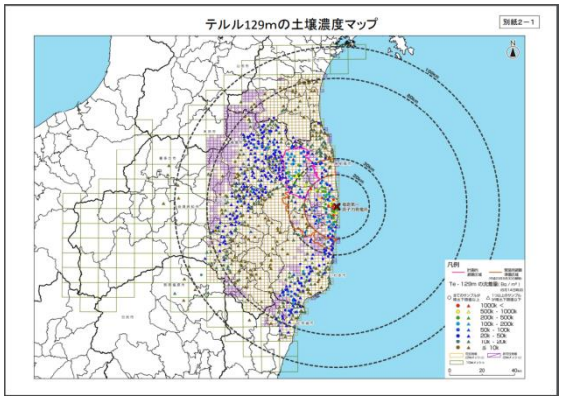
今も変わらず、原子力災害については、その被害の直視が阻まれています。それを乗り越えるために、少しずつでも、力を合わせて努力をしています。

――原子力災害は、見えにくい。ですから、「教訓」をどうやって残すかが、とても難しいですね。

飛田さん：

福島県外では、調査そのものが拒否されていた、ということですね。なるほどと思いました。

アメリカから専門家が来た時「80km 圏外へ避難を」と私たちに伝えました。知り合いの中国国籍の方も、大使館から同じことを言われていました。そのための移動手段まで、手配されていたのです。「80km 圏内」に、宮城県の南部の多くの地域が入りますね。それなのに、多くの方々が避難できずに置かれたことに、私は、怒りを覚えていました。



「文部科学省による放射線量等分布マップ」より。
原発由来の放射性物質が「 80km 圏 」に
広がっていることがよくわかります。

――そうした怒りを覚えることは、本当に、たくさんありましたね。

飛田さん：

はい。山下俊一さんのような専門家の無責任な発言もたくさんありました。その結果、多くの家庭は分断されました。

そうしたことをもみ消すように、行政は「原発被災者」を「いない」ものとして行きます。たとえば「自主避難」と呼ばれる方々は、その生活費の補助が 2017 年に打ち切られ、住宅の家賃を 3 倍にされてしまいました。それが支払えない人々が、当然ながら、たくさんいます。その人々に今、福島県は「滞納分を払え」と言っている。

本当に、許しがたい、と思います。

鴫原さん：

福島県との県境にある宮城県丸森町には、原発事故現場から「50km 圏内」に含まれるところもあります。私たち岩沼市は「80km 圏」のぎりぎりのところです。当然、原発事故の影響を心配する人は、たくさんいたのです。宮城県は、福島県境近くの測定をせずに「被害を小さく見積もる」ようなことも、あるいは、あったのではないか。そう思わせるような危機意識の希薄さが目立ちました。県境の存在自体が、理不尽なものに思われてなりません。そうした現実の中で、家族の健康を守るために避難した人々を「自主避難」と呼び、そして、その存在を否定し、わずかに行われていた支援をも、打ち切る。本当に、理不尽に思われます。

――それでは、写真を用いて、2022 年の現地の様子を教えてください。

飛田さん：

更地です。2017 年までは住宅があり、かつて生活がなされていた場所です。住まなければ家は傷み、そしてイノシシなどが荒らします。それで更地にせざるを得なかった。しかし、そこには雑草が生えてきます。「その雑草は、所有者個人で刈れ」ということになっているそうです。でも、ここの土壌汚染はひどいのです。それでも「避難指示解除をしたのだから帰れ。この土地を管理しろ」と言われる。理不尽が、ここに露わです。

「売地」となっていますね。浪江の駅前で「坪 30 万円」だったのが「10 万円を切った」そうです。更地にすると、固定資産税が 6 倍になる。それでは持ちきれない、ということで、200 坪の土地をただ同然で手放そうと、町に相談したら「困る」と言われたそうです。「困るのはこっちだ」と、持ち主は憤っていました。

復興住宅は、きれいに作っています。でも、そこに住む人は、高齢者ばかりです。これから、運転はどうなるか。というのも、自動車で片道 1 時間かけて病院に行く生活を強いられるのです。結果として、仮設住宅のあった場所に「住む場所」を別に持つ人が、とても多い、ということになります。大変な経済的負担です。

そして、その「避難指示解除された場所」は「1.2 マイクロ Sv/h」を超えていたりするのです。もちろん、近くの駅の構内に入れば、「0.24 マイクロ Sv/h 程度」になる。これでだいたい、どのガイガーカウンターでも警報を鳴らして避難を呼びかける数値ですね。これは 2022 年の 9 月のことです。

「1 マイクロ Sv/h は、たいしたことない」と語る人に、現地で会いました。原発前の数値は「0.03～0.07 マイクロ Sv/h 程度」だったとお知らせしたら、憤っておられました。「私たちは、バカにされたんだ」と。60 代の女性でした。

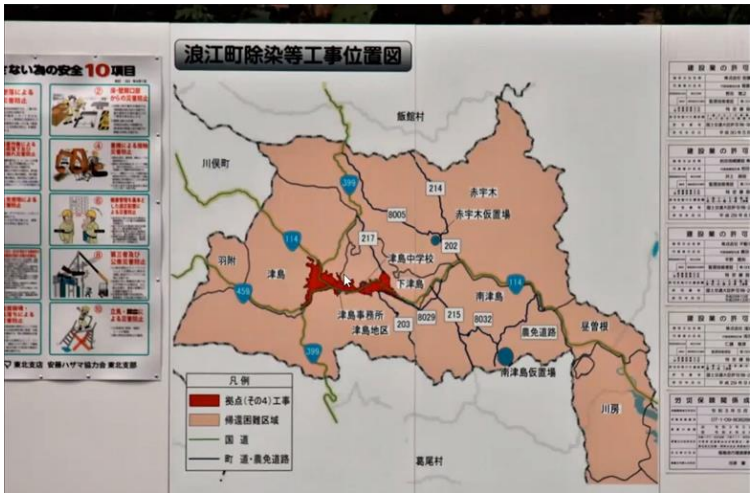
避難指示解除となった双葉町から、内陸部の大都市である郡山市に戻る車中、手元のガイガーカウンターが警報を鳴らしました。「3 マイクロ Sv/h」でした。驚いて自動車を停め、車外で測りますと「8 マイクロ Sv/h」だったのです。でも、その場所で、作業員が除染作業をしている。マスクすら、していない。驚き、心配になって、役場に電話しました。すると役場の職員は「そこは駐車禁止だから、自動車を停めて写真を撮ったのはおかしい」と言うのです。「車内で異常を感じたから、外で状況を確かめたのだ」と言いますと、黙ってしまう。そして「あの屋外作業員は、被ばくしてしまう、心配だ」と伝えると「その作業員を雇用している会社が、きちんとしているはずだから、大丈夫」と言い、それ以上は黙るのです。それが、現実の役場の対応なのです。

双葉駅側に、役場ができました。人がいないのに、行政がある。人がいるから、役場ができる、はずなのです。物事の順序が、完全に逆転しています。なにか、こう、異様ですよね。

現地で働く人々は、時にマスクもしていない。「県に問題を提起しても回答がない」とのことでした。そこは「3.32 マイクロ Sv/h」ありました。2022 年 8 月のことです。その後もう一度行ったら、その「倍」になっていました。現地で作業している人に話を聞きました。早期退職者は２０名も出ており、これから増えるだろう、とのことでした。

倒壊しかけた家も、そのまま残されています。「危ないから」と壊しますと、固定資産税が 6 倍かかる。だから「手つかず」の家も多くあるのです。当時のままの姿の家の中は、本当に大変な状況になっている。

このお寺は、長く、板で囲われていました。猪が、荒らすからです。結局、それで、お寺も解体されました。その場所は、除染したのだそうです。しかし、「1 マイクロ Sv/h」以上ありました。そこに蕨（ワラビ）が群生している。その蕨を調べますと、「1,400bq/kg」以上の放射能が検出されました。「100bq/kg」であっても、大変なことだと思います。問題の桁が、違ってしまっています。



この看板の赤い地区だけが「除染完了」なのだそうです。そして、ここに帰還させようとしている。風が吹けば、周囲から「除染されていない土」が舞い込む。イノシシが走り回っても同じです。除染は意味を失うのです。「実際、戻ったはいいが、道路の両脇は除染してくれない。そこを猪が運動会をしている。恐ろしいので、帰れない」という話を、現地で聞きました。でも「マスコミにはマイナスを言うな」と、なんとなく、言われている、とのことでした。

鴫原さん：

すごい現実です。でも、こうしたことは、福島県内では問題にならないのですか？

飛田さん：

福島県では、マスコミに、絶対、こうしたことは載らないのです。放射能のことは言わないことになっている。「除染したから戻る」とだけ、報道されています。そうして、分断が進められているのです。「もう終わったことでしょう」と思う人が増えている。そして他方に、「これが現実なのか」と言葉を失う当事者が増えているのです。本当に、マスコミ情報だけを得ている人は、何も知らないで時を過ごしています。だから「原発避難者は多額の金をもらって」と、悪口が言われる現実が広がるのです。

私も、マスコミに現実を伝えます。すると、「取材に行きます」と言うけれど、誰も、来ない。

――先日の石巻での展示会に、現地で作業員だった方が来てくださいました。
その方も「みんな3箇月で辞めている」と言っておられました。

鴫原さん：

マスコミも、作業員も、みんな、知っている。
でも、黙っている。そして、どんどん、情報は広がっている。・・・そういうことなのですね。

飛田さん：

「マスコミに語るな」ということは、帰還した人々に対して、はっきり、確かに、言われているようです。でも、それを「誰が」言っているかは、もう少し、取材して確かめなければなりません。皆さん、口が重いのです。

――「往復3時間かけないと病院にいけないところ・震災前の100倍の放射線量のところへ、帰れ」と、危険なことを無責任に言いながら、「その現実は語るな」と言う。そういう世間の雰囲気が、確かにある、ということですね。

飛田さん：

帰還しても、普通の生活は、送れません。「困った」と役場に相談しても、何もしてくれないのです。帰るまでは、いろいろ親切なのですが、帰ったら、棄民政策。それが現実です。

鴫原さん：

「帰った」という既成事実だけが、作り出されているのですね。その後のことは手付かずに放置される。「復興」とは、一体何か。その言葉によって、問題から目を逸らさせているのではないか。被害を語らせない、見せない、認識させない、ということ。それは、宮城県何に住む私たちにとって、切実に身に覚えのある、恐ろしいことだと思います。

飛田さん：

復興どころか、復旧もできていません。

私の街には「コミュタン福島」という施設があります。「福島県環境創造センター」とも言います。「県民の皆さまの不安や疑問に答え、放射能や環境問題を身近な視点から理解し、環境の回復と創造への意識を深めていただくための施設」だそうです。その施設で、今、子どもたちを集めて、いったい何を説明しているか。自然放射能のことしか話していないのです。「1 ミリ Sv/h は大丈夫だ」と教えている。その様子を見ていたら、そこでの撮影は禁止だ、写真資料は消去しろと言われました。

「自然界から出る放射性物質は、８つくらいしかない。原発からは、３００種類以上の放射性物質が出ている。その二つを比べることはおかしい」と私が職員に伝えると「そんなことは知らなかった」と驚かれました。そしてゆっくり話をしましたら、職員からも本音が出て来ました。「私も、疑問に思っている。私にも子どもがいるのだ」と。

鴫原さん：

子どもが動員されているのですね。「復興教育」という言葉がありますが、「心配ない」という動員でしかない。

飛田さん：

何とか、子どもたちに、本当のことを伝えたい。そう思っています。今、全国、全世界に、発信をしています。特に関西などでは、熱心に受け入れてくれています。

鴫原さん：

福島県内では、どうですか？

飛田さん：

県内の写真展は、時々、開催させて頂いています。でも、絶対、そのことは新聞に載りません。県外で行うと、大きく取り上げてもらえます。

面白い話がありました。福島県のテレビ局のお話です。系列の長崎のテレビ局が、長崎での写真展について、大きく取り上げてくれました。その特集は、非常に評価が高いものとなりました。それを見た福島のテレビマンが、私に教えてくれたのです。「あれは良い特集だった。でも、うちではできない。やればクビかな」と。

鴫原さん：

なぜでしょう・・・

飛田さん：

見せたくないのでしょう。

――「隠れキニシタン」という映画がありますね。私も、直接、福島県のお母さんから「私たちは、世間をはばかりながら、子どもたちの健康を心配しています。心配していることを、隠さなければなりません。私たちはまるで、隠れキリシタンのようなのです」と言われたことがあります。

飛田さん：

石巻での写真展では、本当にたくさんの方が、自分のことのように捉えて、写真を見てくださいました。熱意があって、ただことではない、と、真剣だったと思う。そして、NHK が、テレビでもラジオでも、東北全域をネットして、写真展の開催を伝えてくれました。

その少し前、仙台市で写真展を開催したときも、平日朝 10 時でしたが、若いお母さんたちで、会場はぎっしりになりました。

鴫原さん：

本当は、みんな、現実を知りたいのです。でも、それが阻まれている。それはおかしなことだと思います。「復興」が錦の御旗になって、真実を隠すために使われている。語れない世間の空気を作り出しているのだと思います。そして、「原発再稼働の動き」と、福島の被害を小さく見せることは、連動しているのだろうと想像します。

飛田さん：

つまり、８０年前の「大本営発表」と同じになってきているのです。「風評」という言葉が間違って使われている。それは「実害」なのです。

――他方で、2022 年５月には「1号機格納容器内調査において、原子炉を支えるペデスタルの基礎が溶融しコンクリートが溶け鉄筋と鉄骨がむき出しになっている写真」が、東京電力と国際廃炉研究開発機構によって、公開されました。地震の度に「1号機は大丈夫か」と心配しければならない。そうした現実も、徐々に明らかになってきていますね。

飛田さん：

はい。私も、来年３月に、東京で２ヶ所、講演会をします。８月には三重でも開催します。他にもどんどん展開して、真実を伝えたいと思います。コロナの落ち着きを待っているところです。

鴫原さん：

大切な働きをなさっておられますね。

でも、放射線量の高いところへの取材が続きますことは、本当に、心配です。

飛田さん：

これから数千年を考えて、その基礎を据えたいと思っているのです。「私はお嫁さんになれますか」と、2011 年に、福島県内で、小学校 4 年くらいの子に聞かれて、私は泣きながら帰ったことがあるのです。そこから、今の自分は始まっている。あの言葉を、毎日、思い出しています。「あの子も、短大卒業して、今度、就職する」と聞きました。本人は、その言葉を忘れているでしょう。でも、私に中に、その言葉は生きています。

私も、放射能を甘く見ているつもりはないのです。でも、それでも、できることはしなければ。そう思っています。

――帰還者も、現地作業員も、そしてマスコミも、みんな、現実を見て知っている。ただ、それが語られないように、何かの力がかかっている。でも、それはもう、程なく「無理」となるのでしょう。「大本営発表」は、1945 年 8 月 15 日を境に、確かに溶けて消えました。同じようなタイミングが、また、近づいている気がします。お話を伺って、そう思いました。

飛田さん：

実際、宮城県議会では、脱原発派が２０人になったと、先日、石巻で伺いました。

真実は、きっと、勝つと思います。自分も、頑張ろうと思います。

（進行 ： 川上直哉）

福島市に、新しい計測所を

2011 年 3 月 11 日の地震は、巨大な揺れと津波によって、福島第一原子力発電所を破壊しました。

その影響は広範囲に・長期に及び、今なお、多くの場所で「震災前であれば即刻 避難」となるはずの放射能の値が確認されています。

東北ヘルプは、全国・全世界のお力をお借りして、教会をはじめとする被災地の方々の要請にお応えし、2011 年以来、「放射能計測所」を設置・運営してきました。福島県内の方々を主体として「食品放射能計測プロジェクト共同運営委員会」が立ち上げられ、その事務局を、東北ヘルプが担ってまいりました。計測所は仙台市と郡山市といわき市に設立されました。その活動は、地域の方々との協働の中で、今も継続しています。とりわけ「土壌」の汚染の高いホットスポットを確認して子どもたちの安全を守る等、大切な役割をお預かりしていると、感謝を重ねています。

2022 年、「食品放射能計測プロジェクト共同運営委員会」は一つの決定をしました。「仙台市の計測所を、福島市に移設する」というものでした。

計測所を設置するために、キリスト兄弟団福島教会様が協力を申し出てくださいました。使われなくなった礼拝堂を、地域のために用いて宜しいと、ありがたいお言葉を賜ったのでした。

早速、礼拝堂の一室を「計測所」とするための検討が始まりました。計画は順調に進み、今年（2022 年）の年末には、移設できる見通しで動いています。

移設のための経費も、各方面の協力により、最小化することができました。その工事見積書がございます。そして、福島市で計測事業を担ってくださいます大島牧師に、この新しい計測所へのご支援をお願いする文章をお書き頂きました。大島牧師は、「ニュースレター2021 年秋号」にご登場くださり、福島市内のご自宅の土壌から「14 万 Bq/kg」（震災前の約 1 万倍程度）の放射能値を確認したことを報告されていました。(その記事は右の QR コード、あるいは http://touhokuhelp.com/jp/secretariat/33/index.html から、ご高覧頂けます)。

未だ「復旧」もままならない原子力災害被災地です。みなさまの息長いご支援を、本当に心強く感謝しております。どうぞ、新しい計測所も、お覚え頂ければ幸いです。

食品放射能計測書計測プロジェクト共同運営委員会　委員長
NPO 法人 東北ヘルプ　代表　川上直哉

みなさま

主の御名を賛美します。日頃より、お祈り、お支えを心より感謝いたします。

新型コロナウイルスの発生とその感染拡大は、これまでの私たちの生活と共に、教会の活動にも大きな変化をもたらしました。それまで当たり前に集まって礼拝を献げ、祈りを積み、主にある交わりと愛の業を行ってきた私たちは、それを断念しなければならなくなりました。しかし熱い祈りとチャレンジによって、WEBという手段を得て活動を続けることができました。ただそれにも、光と影があることも知らされています。そのような中で、祈りとみ言葉によっていつも最善を目指していくことを改めて学んでいます。

同じように福島における「放射能」被害は、当たり前の生活や行動、健康が当たり前でないものとされました。11 年前に出された「放射能非常事態宣言」は未だ解除されていません。「復興」という言葉によって、不安や恐れ、悲しみや悔しさを封じ込めようとする力は、私たちに重くのしかかっています。これらは、祈りとみ言葉によって越えなければならない大きな課題です。私たちが信じて生きる深い所に、祈りやみ言葉によって主への期待・信頼を置かなければ、いつでも潰れてしまうような重く、大きな課題です。そのような私たちに、主は共にいてみ業を起こしてくださり、支え、励まし、導いてくださっています。

今年4月、キリスト兄弟団福島教会は50年余にわたる活動を終了されました。長年にわたる諸活動を担った教会堂は、会堂を持たない福島主のあしあと教会の礼拝や祈祷会、さらに諸活動推進のために使用することを許してくださいました。そのような中、東北ヘルプと福島県キリスト教連絡会（FCC）は、この教会堂の一部に「放射能計測所」を設置して、福島市とその近郊に新たな活動拠点を始めることへと導かれました。

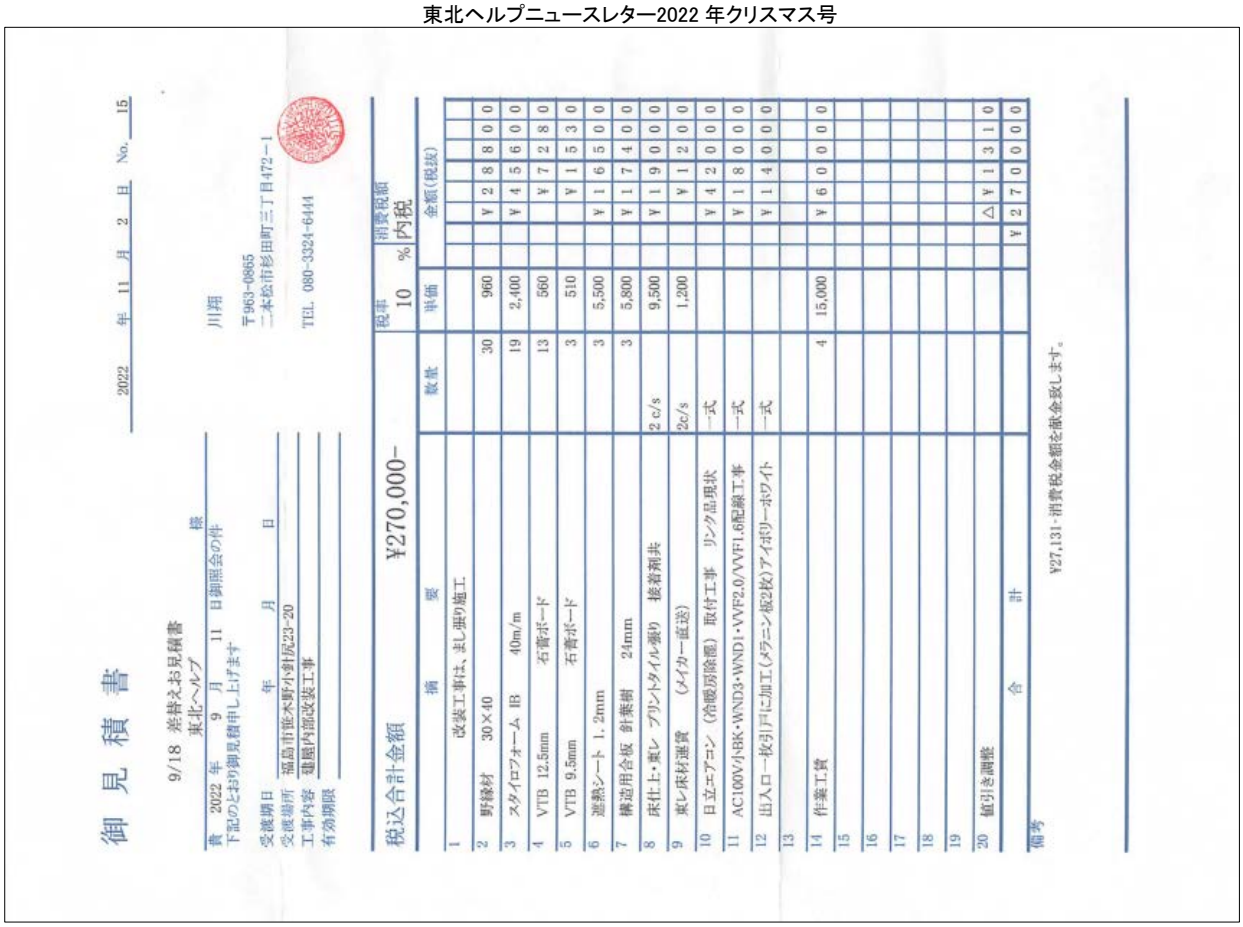
東北ヘルプと福島県キリスト教連合会は、宮城県仙台市と福島県郡山市、いわき市に「放射能計測所」を設置して、大きく重い放射能被害の対策を担ってきました。今年、仙台計測所の活動が終了しました。しかし新たに、福島市での計測所開設が実現し、新しい活動へと導かれました。長年にわたるキリスト兄弟団福島教会の活動終了、仙台における放射能計測所の活動終了という残念で、マイナスに思えることではありましたが、新しく福島市での活動へと導かれたことに、主が生きておられ、私たちの思いを超えた主の働きと業があり、そこに加えていただける不思議を思わずにはおれません。福島県内の郡山市、いわき市での活動と共に、いよいよ福島市での活動が始まります。教会が地域にあり、開かれ、地域の方々と出会い、その方々と共に、大きく、重く、長い時間のかかる「放射能被害」という課題に対して取り組んでいきます。どうぞこれから始まる新しい「放射能計測所」の働きのために、それを担う教会のためにお祈りください。そしてお支えください。機会を得て、ぜひお訪ねください。ご一緒に主のなされる働きを見、そこに加えられましたら嬉しいです。今後ともよろしくお願いいたします。

皆さまに、心から主の祝福をお祈りいたします。

在主

「見よ、初めのことは成就した。
新しいことをわたしは告げよう。
それが芽生えてくる前に
わたしはあなたたちにそれを聞かせよう。」
――イザヤ42章9節

福島主のあしあとキリスト教会牧師
東北ヘルプ理事
福島県キリスト教連絡会（FCC）放射能対策室副代表
大島博幸



御見積書

2022 年 11 月 2 日 No. 15

9/18 差替えお見積書
東北ヘルプ 様

貴 2022 年 9 月 11 日御照会の件
下記のとおり御見積申し上げます

川翔
〒963-0865
二本松市杉田町三丁目472－1
TEL. 080-3324-6444

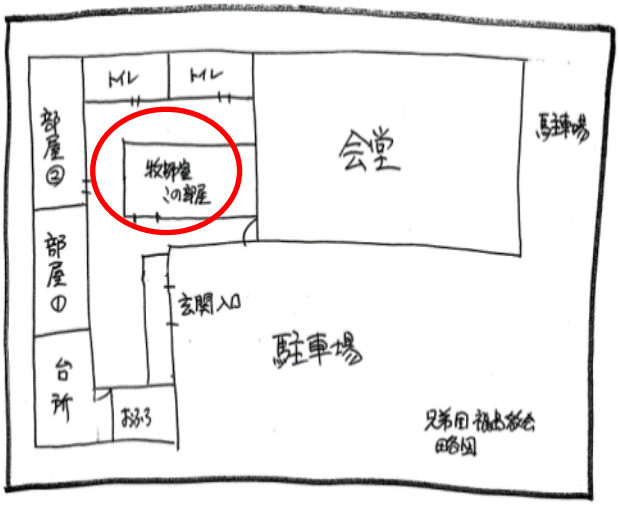
受渡期日 年 月 日
受渡場所 福島市笹木野小針沢23-20
工事内容 建築内部改装工事
有効期限

税込合計金額 ¥270,000-

	摘要	数量	単価	税率 10 %	消費税額 内税	金額(税抜)
1	改装工事は、まし張り施工					
2	野縁材 30×40	30	960			¥28800
3	スタイロフォーム IB 40m/m	19	2,400			¥45600
4	VTB 12.5mm 石膏ボード	13	560			¥7280
5	VTB 9.5mm 石膏ボード	3	510			¥1530
6	遮熱シート 1. 2mm	3	5,500			¥16500
7	構造用合板 針葉樹 24mm	3	5,800			¥17400
8	床仕上・束レ プリントタイル張り 接着剤共	2 c/s	9,500			¥19000
9	束レ床材運賃 (メイカー直送)	2c/s	1,200			¥12000
10	日立エアコン (冷暖房除湿) 取付工事 リンク品,現状	一式				¥42000
11	AC100V小BK・WND3・WND1・VVF2.0/VVF1.6配線工事	一式				¥18000
12	出入口一枚引戸に加工(メラニン板2枚)アイボリーホワイト	一式				¥14000
13						
14	作業工賃	4	15,000			¥60000
15						
16						
17						
18						
19						
20	値引き調整					△¥13100
	合計					¥270000

備考

¥27,131-消費税金額を献金致します。



上は、新しい計測所を設置させていただく
旧 キリスト兄弟団福島教会。

右は、設置の打ち合わせをしている
大島牧師と木田牧師。

左が、仙台市から福島市へ移設する
放射能計測器。

献 金 感 謝

東北ヘルプは「献金」で成り立っています。
「3. 11」発災以来、私たちは
「献金は、一つひとつ、祈りである」と語り交わし、
深く支えられてきました。
以下に、この一年のご献金者ご芳名を記します。
お一つお一つのお名前に、深い祈りを感じます。
東北を覚えてくださいますそのお心に、深く感謝いたします。

2022 年 11 月 23 日　川上直哉 記

大曲ルーテル同胞教会　日本基督教団 新生釜石教会　日本基督教団日詰教会　沼倉孝憲　金野壮　沼倉孝憲
金野壮　遺愛女子中学校・遺愛女子高等学校　日本基督教団札幌教会　北海道キリスト教会　真宗大谷派
聞光寺　佐藤智眼　世の光キリスト教会　釧路キリスト福音館　橋本智子　長山忠雄　松本重雄　清水俊一
日本基督教団下谷教会　フリースクール恵友学園　特定非営利活動法人 DOVXA　芦田政子　徐 鐘煥
日本キリスト教団青戸教会 子ども礼拝　東京むかでワイズメンズクラブ　瀬戸章子　清水恵子　長野由紀
東洋英和福島の子ども支援プロジェクト「虹の橋募金」　日本基督教団原宿教会 子ども礼拝　牧甫　平井純子
日本基督教団　頌栄教会　日本同盟基督教団世田谷中央教会　日本基督教団東京都民教会　石井智恵美
日本キリスト教会東京告白教会　久遠基督教会　日本基督教団杉並教会　竹本栄子　松浦賢治　聖書友の会
大原武夫　板橋大山教会　佐々木宏子　徳丸町キリスト教会　大日方由美　木村葉子　　東京カペナウム教会
金井美智子　国際基督教大学教会　塩田隆良　水永晃子　日本キリスト教会 府中中河原教会　田名綱健雄
日本同盟基督教団恋が窪キリスト教会　日本基督教団小平学園教会　日本基督教団ひばりが丘教会　大谷偕子
中山 信一・朝子　村田藤江　日野神明キリスト教会　工藤ますみ　松香光夫　よろこび研究会 奥田英男
松井弘子　城井廣部　美野川芳枝　遠藤茂雄　日本キリスト教団横浜上原教会　入江修　塩田 瑞代　辻剛
日本基督教団田園江田教会　佐川英美（東京基督大学）　鈴木茂　日本キリスト教会鶴見教会　岡本連三
日本基督教団横浜指路教会　日本キリスト教会横浜湾岸教会　日本キリスト教団蒔田教会　福井紀子　森和亮
愛のいずみキリスト教会 水井純子　日本キリスト教会横須賀教会　沼崎真奈美　宮坂信章　島田祥子　若月学
日本基督教団西千葉教会　日本キリスト教団美浜教会子どもたちの教会　稲毛海岸教会　木村庸五　山中伸郎
日本キリスト教団新松戸幸谷教会　市民クリスマス in 千葉事務局長 青木一芳　日本基督教団市川三本松教会
磯田幸子　倉石 昇　川上政孝　日本キリスト教団四街道教会　長谷川光孝　板東由紀子　関田寛雄　小川暢子
新津テイ子　日本キリスト教団取手伝道所　山口由紀子　宮崎昌久・せい子　日本キリスト教団 下館教会
日本キリスト教団宇都宮松原教会　日本キリスト教団四条町教会　杉原敬三　飯沼一浩　萩原恵子　鈴木伸子
日本基督教団西那須野教会　認定こども園 西那須野幼稚園　オリーブの木キリスト教会　新座志木教会
聖書キリスト教会のぞみ教会　有山敏　星野房子　猪瀬恭子　新所沢教会　中村忠男　引間春一　山田直司
日本キリスト教団甘楽教会　井出存祐　日本基督教団松井田教会　石川裕美　日本基督教団軽井沢追分教会
日本キリスト教団松本教会　足立正範・実紀子　日本キリスト教団山梨教会 及川信　富士吉田キリストの教会

森重男　荒川千秋　羽野浩雪・環　竹下博実　日本キリスト教団遠州栄光教会 代表 星野健　鈴木淳司
日本キリスト教団岡崎茨坪伝道所　眞柄周吾　加藤啓子　日本基督改革派名古屋教会　名古屋中村教会
日本キリスト教団名古屋中村教会　社会福祉法人 名古屋キリスト教社会館 理事長 湧井規子　和田弘夫
日本キリスト改革派教会　名古屋岩の上教会　日本基督教団名古屋中央教会　原科浩　伊藤まり子　尾関幸子
名古屋キリスト教協議会事務局　日本キリスト教団天白教会　日本キリスト教団 南山教会　中島隆宏
川本龍資　渡辺真悟　長谷川正一　近藤直枝　櫻井志穂子　田川徹　山のハム工房ゴーバル　細川富代
井戸謙一　柴田謙　日本基督教団天満教会　日本コイノニア福祉会　大宮まぶね保育園　李相勲　横田憲子
在日大韓基督教会全国教会女性連合会　本村大輔　橋本啓子　日本基督教団池田五月山教会　似田兼司
日本バプテスト宣教団池田キリスト教会　藤田直子　生島幹也　杉林則子　今川泰彦　佐藤孝子　櫻井暁美
忍ヶ丘キリスト教会 佐藤孝子　津戸眞弓　八尾福音教会 道本純行　日本自由メソヂスト 葛城キリスト教会
重岡奈津子　日本基督教団泉北栂教会　濱田辰雄　上野芝キリスト教会災害献金代表世話人千葉一夫
日本キリスト教団京都南部地区 前川裕　日本基督教団 同志社教会　日本基督教団室町教会　国兼光子
日本キリスト教団京都上賀茂教会　日本基督教団鴨東教会　京都丸太町教会　国際シャローム・キリスト教会
在日大韓基督教会京都教会女性会　代表者 千末仙　奈良いずみ　春名克容　阿部克巳　阿部望・典穂　松本聡
神戸改革派神学校学生会　熊谷郁子　光田隆代　上坂寛子　荻原邦子　岩間節子　神戸弟子教会　森康彦
日本キリスト教団西神戸教会　日本キリスト教団 須磨教会 こどもの教会　西牧夫・あゆみ　小林文　上山尚美
日本キリスト改革派灘教会　シャローム武庫川　キリスト教会　日本基督教団 尼崎教会　永田惠　瀬戸昭
社会福祉法人イエス団みどり野保育園 中田一夫　日本基督教団 西宮一麦教会　河内常男　近藤 晶彦
瀬戸昭　日本基督教団はりま平安教会　佐用チャペル 代表者 松本直展　仙田典子　岡田純爾　橋本富子
日本キリスト改革派岡山教会　日本同盟教団西大寺キリスト教会 牧師西村敬憲　日本キリスト教団児島教会
アイジイエル広島福音教会　IGL 広島福音教会　東広島伝道所女性会　坂上好登　佐竹早苗　芳我秀一
日本キリスト改革派徳島教会　寺内利行　青柳芳明　細田あゆみ　日本基督教団 門司大里教会　時田公文
小倉徳力教会　日本キリスト教団 小倉徳力教会　日本キリスト教会 福岡城南教会　金子純雄　濱地正枝
濱地正枝　宮井武憲　日原広志　井上和人　吉田正子　ルーテル健軍教会　日本基督教団　喜界教会
友愛幼稚園　改革派熊本伝道所 財務 本多ミヨ子　山田勢津子　日本バプテスト連盟金沢キリスト教会
北陸学院中学・高等学校宗教部　矢部邦子　幕田君江　伊東美香　吉田昭男　金南植　鈴木真理子　山室誠
日本基督教団東北教区放射能問題支援対策室　新里・鈴木法律事務所 太田伸二　尚絅学院中学校・高等学校
日本キリスト教団北三番丁教会　鳫平恵美子　赤崎克俊　石巻ワイズメンズクラブ 清水弘一　仙台北教会
鐸木道剛　山室誠　松谷寛元　小林喜成　尚絅学院大学宗教部　木村すげみ　松本芳哉　佐々木公明
佐藤雅俊　髙橋直子　髙橋直子　日本バプテスト連盟南光台キリスト教会　阿部頌栄　太田裕吾　小幡正
千葉あつ子　阿部紀美子　三條信幸　石巻広域ワイズメンズクラブ 会長 日野峻　原伸雄　山田みき
特定非営利活動法人セミナ～レ理事長 佐藤工　石丸靖子　西川京子　古川幼稚園　南部正光　松木健三
森憲一　日本基督教団 久ヶ原教会　日本基督教団石巻栄光教会　吉田伸　小川圭一　フナハシヨウコ
大倉一美　川上恵　仙台 YMCA　サクライシホコ　タカハシユミ　匿名（多数）

以上、順不同・敬称略。

期間：2021 年 11 月 17 日～2022 年 10 月 13 日

総額：4,988,757 円

会計報告

収支計算書

2022年4月～2022年10月

2022.10.12現在

（単位：円）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月		計
会費収入		5,000							5,000
献金収入	1,386,870	537,225	282,749	142,500	125,541	549,744	70,300		3,094,929
事業復活支援金	1,000,000	100,000							1,100,000
預金利息	1				6		2		9
収入計	2,386,871	642,225	282,749	142,500	125,547	549,744	70,302	－	4,199,938
法定福利費			1,232						1,232
新聞図書費	20,307	29,254	35,803	6,970	27,641	33,469	27,416		180,860
通信費	23,604	43,153	22,035	41,629	29,023	28,187	11,229		198,860
支払手数料	9,603	2,858	2,155	1,065	1,534	5,918	811		23,944
外注費	38,500	60,500	38,500	93,500	38,500	38,500	38,500		346,500
事務費	42,050	71,359	42,120	73,174	77,241	96,815	35,931		438,690
広告宣伝費	120,511	91,975				123,364	111,841		447,691
旅費交通費	135,980	216,332	148,499	116,699	83,537	118,401	54,915		874,363
燃料費	15,000	34,189	30,339	49,958	28,657	20,000	46,800		224,943
会議費	16,025	7,500	3,340	36,167	26,469	43,066	50,000		182,567
支援費	104,549	95,000	74,900	43,510	35,000	60,000	5,000		417,959
支出計	526,129	652,120	398,923	462,672	347,602	567,720	382,443	－	3,337,609
収支差額	1,860,742	−9,895	−116,174	−320,172	−222,055	−17,976	−312,141	－	862,329
							前期繰越		1,057,032
							次期繰越		1,919,361

献金集計表(累計)

2022.10.12現在

	計	
	件数	金　額
2011年	256	120,271,287
2012年	592	165,673,327
2013年	619	138,543,737
2014年	651	29,420,520
2015年	629	17,973,940
2016年	692	14,465,518
2017年	750	12,491,525
2018年	649	10,796,867
2019年	522	8,836,872
2020年	521	6,788,613
2021年	608	7,507,178
2022年	311	5,588,929
	6,800	538,358,313

2022年　献金集計表

	計	
	件数	金　額
1月	52	423,500
2月	39	536,800
3月	40	1,533,700
4月	62	1,386,870
5月	17	537,225
6月	17	282,749
7月	13	142,500
8月	21	125,541
9月	44	549,744
10月	6	70,300
11月	－	－
12月	－	－
	311	5,588,929

2011 年 3 月 18 日から始まった私たち「東北ヘルプ」は、当初、海外からの大きな支援プロジェクトを請け負う役目をお預かりしました。そうした大プロジェクトは順次 無事終了した後も、個人と教会等の「一つひとつ」のご支援によって、なお、活動を継続しております。昨年度・一昨年度は「コロナ」関連の給付金を頂く事ができ、併せて組織の縮小を進めまして、ようやく「一息」をついたところです。今後、財務的にも持続可能性が確保できますよう、覚えてお祈りいただければ幸甚に存じます。

2022 年 11 月 23 日 東北ヘルプ代表 川上直哉 記

巻 末 言

東北ヘルプは、12 年目の歩みを進めています。「12 年」の間、ずっと、伴走してくださった皆様がおられました。そのお支えによって、今年も歩みを進めることができました。

お支え下さっている方から、時々、「あの支援活動は、今どうなっていますか？」というご照会をいただくことがあります。そうしたことをきっかけに「しばらくぶり」となる現場に連絡を取り、安否を確認し、活動の困難や喜びをお分かち頂くことができます。「中間支援団体」と呼ばれる私たちならではの、これは特別な喜びです。

このニュースレターを作成中に「子どもの夢ネットワークの活動は、今、どうなっていますか」と質問をいただきました。「子どもの夢ネットワーク」の活動は、東北ヘルプのニュースレター「2018 年夏号」と「2021 年イースター号」でご紹介し、皆様の尊いご献金をお届けしてまいりました（ぜひ、東北ヘルプのホームページから、バックナンバーをご覧下さいませ）。早速、過去のインタビュー記事にご登場いただいた藤田毅さん（仙台キリスト教育児院副園長）に、お電話を致しました。「コロナ」で活動が滞っている、と、半年前に伺っていたことでした。それでも、お電話でのお声は、実にお元気そうなご様子でした。とても心強く励まされたことでした。そのお電話で伺ったお話の概要は、以下の通りでした。

1. 社会的養育・養護（児童福祉施設・ファミリーホーム・里親等）の中で成人となった方々の「その後」を支援するための活動は、細々とながら、続いている。具体的には、仙台市内に「夢歩（ゆめっぽ）」という施設を開設し、水曜日と日曜日に誰でも相談に来ていただける体制を続けている。

2. その活動のための資金は、「3.11 被災地復興」の事業として特別に開発された“チョコレート” を包装・販売して、獲得してきた。その包装・販売事業は「社会的養護」を経て成人した方々にアルバイトの場を提供するものにもなった。そのようにして、手探りで始まった「子どもの夢ネットワーク」の活動は、困難な中でも順調に推移していた。しかし残念ながら、「コロナ」の影響により、「包装・販売事業」は止まってしまった。

3. 今年の10月12～13日、仙台ガーデンパレスにて、「コロナ」で延期を余儀なくされてきた「小舎制養育研究会」の大会が開催され、全国から100名ほどの参加者があった。そこで “チョコレート” の販売事業を再開することができた。活動資金が枯渇してきたところであり、大変助かった。ここからまた、改めて活動を活性化して行きたい。

被災地は、復興を目指して歩み続けています。その歩みは、様々なことによって、しばしば足踏みを余儀なくされます。しかし、その歩みに伴走くださいます皆様がおられます。そのお心に支えられ、多くの現場の敬愛する方々と共に、またしっかり歩みを進めたいと、感謝を深めたことでした。

（2022年11月22日 川上直哉 記）

支援金・献金の受付口座

【郵便振替】
02290-8-136273
特定非営利活動法人
被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

【他金融機関からの振込口座】
ゆうちょ銀行　二二九店
当座預金　0136273

発行責任　NPO 法人　被災支援ネットワーク・東北ヘルプ
代　　表　川上直哉（日本基督教団石巻栄光教会主任担任教師・
食品放射能計測プロジェクト 共同運営委員会委員長）
理事　吉田隆（日本キリスト改革派甲子園教会牧師・神戸改革派神学校校長）
理事　田中武司（保守バプテスト同盟西多賀聖書バプテスト教会員・財務担当）
理事　中澤竜生（基督聖協団仙台宣教センター国内宣教師）
理事　秋山善久（日本同盟基督教団仙台のぞみ教会牧師・NPO 法人 セミナーレ理事）
理事　阿部頌栄（日本ナザレン教団仙台富沢教会牧師・仙台食品放射能計測所長代行）
理事　木田恵嗣（ミッション東北 郡山キリスト福音教会牧師）
理事　大島博幸（日本バプテスト連盟福島主のあしあとキリスト教会牧師）
理事　李貞妊（元「東北ヘルプ」職員）

監事　本村大輔（救世軍泉尾小隊士官）
小河義伸（八王子めじろ台バプテスト教会牧師）
※肩書等は全て 2022 年 8 月現在

Sendai Christian Alliance Disaster Relief Network

Touhoku HELP

Per crucem ad lucem（十字架を通って光へ）

〒980-0012　宮城県仙台市青葉区錦町 1-13-6
TEL/FAX. 022-263-0520　URL：http://tohokuhelp.com　MAIL：sendai@touhokuhelp.com
携帯電話　090-1373-3652